

## 異文化との出逢いー日本語学習の現状と問題

上條 雅子

近年、日本の経済発展とあいまって日本語を学ぶ外国人が国内・国外共に世界レベルで増加している。これら外国人の年齢層は小学生から大人まで幅広い。日本語学習の目的は従来のアカデミックな日本研究に加えて、教育機関における第二外国語としての日本語、労働者や難民に不可欠な日常生活語、ビジネス・技術研修、外交交渉などの専門語の習得と多岐に亘る。日本語のレベルも、従って学習の目的によって異なる。

国外では日本語を自国の言語で学習するケースが多く、日本人と日本語を使用する機会も当然少ないために、特別なケースを除いては日本語の上達は遅く、異文化コミュニケーションの問題も少ない。しかし、外国人が日本で初めて日本文化に接し日本人とコミュニケーションすると、生活と日本語学習両面で期待はずれや落胆、思いもかけない誤解や勘違いなど、いわゆる異文化コミュニケーションの問題が生じる。この問題は年齢、学習目的、日本語のレベルのみならず、民族・国民、異文化適応能力・日本文化に関する知識によって複雑に異なる。問題の共通要因として、限られた知識や間違った情報によって形成されたステレオタイプの日本人、日本の社会・生活習慣・価値観に関するイメージと育った社会背景や価値観によって他民族を判断する自民族主義 (ethnocentrism) が挙げられる。

日本語の基礎に加えて政治、経済、社会、文化に関する日本事情を学んだ英国の学生の場合、茶道、書道、盆踊りなどには興味を示すが、特に価値観に関してはイメージと現実とのギャップが大きいようである。特にホームステイにおいては、日本的なバスツアーなどの集団行動は好まず、始

終束縛されず個人の自由行動を好む英国人の個人主義と外国人を客として扱う日本人の特別待遇が、お互いに異なる方法で「和」を保とうとするために摩擦を起し易い。価値観の違いをいずれかの言語で説明したとしても、お互いに相手の言葉が十分に通じない上に説明も不十分で、結局、価値観と言語の両面から不満、誤解という異文化コミュニケーションの問題が生じる。短期間の日本語研修では、彼等は日本文化に接しながら日本語を使用することを望むようであるが、基礎的な日本語のレベルでは日常会話さえも難しく、日本語の上達はあまり望めないようである。

アジアの学生の場合、日本人との経済観念の違いや働きながら学ぶ学生が多いために、日本人と交流する機会も少なく、自民族主義の域を出ないことが多い。受験や就職という現実的な学習目的の場合は、日本語の上達は早いようである。ビジネス、技術研修、外交交渉などの専門分野においては、自国において事前に日本事情や日本語の高度な知識を習得しているケースが多く、準備された受け入れ機関で日本語を使用することが期待され、学習目的も明確であるから、概して日本語は上達する。しかし、価値観において異文化コミュニケーションの問題は避けられない。発展途上国からの技術研修生は、日本語学習が目的ではないのに英語による講義で「こんにちは」と日本語で挨拶する。彼等にとって近代文化日本のイメージと現実とのギャップは大きく、日本の経済発展と日本人が殆ど英語が話せないという両極端の現状に驚きを示す。アジア諸国や南アメリカからの労働者や難民の場合、日本語の基礎はもとより日本事情に関する知識や日本語習得に費やす時間も

---

皆無に等しい上に、教育背景、経済、生活習慣のレベル、学ぶ意志も低いため、日常生活に関する日本語習得と異文化コミュニケーションの問題は外国人の中で一番大きい。

異文化コミュニケーションの問題を少なくするためには、ステレオタイプのイメージから脱却

すると同時に自民族主義に固執せず、異文化コミュニケーションを密にし、異なる点は認めながら文化的相対性 (cultural relativism) を見出す努力をすることである。この状況下で、外国人学習者にできるだけ多く日本語を話す機会を準備する事が、日本語学習にとって効果的であろう。